ガイダンスカウンセラーの挑戦 3

調整と連携―落とし穴を越えて

特定非営利活動法人ストレス対処法研究所理事
丸山里奈（まるやまりな）

連載テーマ「ガイダンスカウンセラーの挑戦」として、自分のプランニングを客観的に見直す勇気を「（自己への）挑戦」ととらえることにする。

ガイダンスカウンセラーの特徴を考えると、治療的なアプローチとは異なり、「教育」の視点をもって介入できるメリットが第一に挙げられるが、この能力をもつが故に生じるリスクを自覚したことがどのくらいあるだろうか。

どんなにベテランであっても、積み上げてきた経験によるスキルを、時代の流れにあわせて形をかえる柔軟性が問われたり、どんなに有能な素質をもっていても、担当した学校現場に緊張が強く、外から入ってくる者に慣れるまで時間がかかったりすることがあるかもしれない。

児童生徒の心理的支援を有効にするために環境調整が必要であるのと同様に、ガイダンスカウンセラー自身も、自分の介入が有効になるような環境調整が必要である。

筆者のスクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーの経験や、某教育委員会の教育相談研修講師をガイダンスカウンセラーとして担当させていただいて気づいたことをもとに、ガイダンスカウンセラーの役割である「コーディネーション（調整）」と「コラボレーション（連携）」に焦点をあてて検討する。

1　コーディネーション（調整）

○三つのアセスメントからスタート

①学校組織のアセスメント

教育経験者なら誰でも体験しているが、各々の学校の風土が違う。公立学校だと異動もからみ、管理職がかわると空気もかわることが多い。生徒指導の流れ方も細かな点で違ってくる。学校の特徴をアセスメントしないと、例えば、教員同士の人間関係や、次年度の学年のカラーなど環境の調整を有効に提案できない。気持ちとしては「こうあるべき」と示唆したくても、それを誰にどのように伝えれば「なるほど」と納得してもらえるか、学校組織のアセスメントがないと無駄な時間を費やしてしまう。

②先生と児童生徒の関係のアセスメント

人間関係には相性がある。平等に対応していても、受け取り方の違いから誤解が生じてしまうこともある。また、相性だけの問題でなく、カウンセラーとクライアントの関係にもある「転移・逆転移」が、担任と児童生徒との間にも起こりえる。この点は、教師が生徒にとって身近な存在である証拠でもあり、問題が起きた時の解決に重要なカギとなるので、ガイダンスカウンセラーは「教師」という役割が背負う特徴をアセスメントしやすい。

③家庭環境のアセスメント

「プライバシーの保護」やコロナ禍などで、〝見えなくなる〟家族が増えている。ガードを固くしている家庭に介入するのは限界があるが、学校が家庭環境の問題を察知することは多い。なぜなら、問題をかかえている児童生徒が家族の代表としてSOSのサイン（不

登校や非行など）を出しているので、それを機に保護者と接触できるメリットがあるからである。平木（二〇〇三）がいうような家族機能・家族構造への理解は、児童生徒の問題行動の改善に生かせる可能性がある。コミュニケーションの悪循環の連鎖パターンが見えてくると、ガイダンスカウンセラーは家庭環境のアセスメントの重要性を学校と共有し、保護者対応にかかわることができる。直接子どもにかかわっている担任ではない第三者のカウンセラーへの相談を好む保護者には有効である。

また、家庭のアセスメントで、家族の問題解決に外部支援が必要と感じたら、外部機関につなぐソーシャルワーカーとの連携を学校に提案し「チーム学校」を活性化させる。

○経験の落とし穴

ガイダンスカウンセラーである筆者自身、つい「私たちはこんなこともできる」とアピールしたくなるが、重要なのは「経験の落とし穴」を意識すべきことである。

私たちは未知なことに挑戦するときは、細心の注意を払うが、経験値が高いと緊張もゆるむ。また、イメージがありすぎると、勝手な思い込みも出てきてしまう。ガイダンスカウンセラーは医療機関の臨床カウンセラーと違い、教育現場に理解があるというメリットはあるが、教育を知りすぎているためにバイアスがかかることを自覚すべきである。

「××学校で、教員だったというカウンセラーがケース会議にいて、まるで教員の数が増えただけで支援者ではない」という声を耳にしたことがある。ガイダンスカウンセラーの話かどうかは分からないが、思わずドキッとした。「学校を理解できる」という特徴があるので、学校の気持ちが分かりすぎ、教育的視点で指導的な資質は強いのかもしれない。まちがっても「単なる学校のイエスマン」という偏ったレッテルは貼られたくはない。

「前の学校でもやっていたことだから大丈夫」「あの先生は前任校のやり方から抜けられない」「教師は基本的に指示を出す側だから、指示されるのが苦手な人がいる」などを学校現場で聞くと、経験は宝であるが、意識は初心が必要ではないだろうかと考えてしまう。教育現場を知らない臨床カウンセラーの方が、バイアスがかからず素直にケースを把握すると思われるのは残念である。経験があればあるほど、自分の見立てやプランニングを見直すスーパービジョンを受ける姿勢が必要である。

2 コラボレーション（連携）

前にも触れた「チーム学校」が、まだうまく成り立っていない学校も多い。学校は地域の特徴など様々な問題もかかえているからだろう。

学校内の調整と並行して、校内や外部機関との連携は不可欠である。最近よく問題とされる虐待のケースも、学校が見つけてくれることが多い。このように「かかえこまない」「役割分担」を奨励し、学校外専門機関の連携を考えるスクールソーシャルワーカーにつなげることも重要であるが、福祉の専門家であるスクールソーシャルワーカーに「教育の視点（学校の気持ち）」を代弁できるのも、ガイダンスカウンセラーならではである。

また、問題が起きた時だけが連携ではない。「未然予防」に加担できるガイダンスカウンセラーは、開発的カウンセリングの視点で学校外の社会資源（地域活動や異世代交流など）との連携で、「生きる力」の学びを「チーム学校」として企画を立てられるのではないか。

「知りすぎた落とし穴」を自覚して、自己研鑽（さん）を重ね、ガイダンスカウンセラーのストレングスを活用していきたいものである。

参考文献

・平木典子『家族との心理臨床―初心者のために』垣内出版株式会社、一九九八年。
・スクールカウンセリング推進協議会編著『ガイダンスカウンセラー実践事例集』学事出版、二〇一三年。